

風姿花伝第四、神儀云 申楽神代の初まり

一、申楽神代の初まりと云ふ

は、天照大神、天の岩戸に籠もり給ひし時、天下常闇に成りしに、月神の御子、島根見尊を初めたてまつりて、神達、天の香久山に集まり、大神の御心を收らむ

〔口訳〕

申楽の神代に於ける最初は、天照大神が天の岩戸に御籠り遊ばした時に、天下が常闇になつたので、月神の御子の島根見尊をはじめて諸神達が、天の香久山に集られ、天照大神の御機嫌を直さうといふので、神樂を奏し、細男を御はじめになつた。その中にも、天の鉏女命が進み出られ、榦の枝に幣を附けて、歌をうたひ、ほどろくと足踏をせられ、神懸りの状態で歌舞せられた。その声が、かすかに聞えたので、大神が岩戸を少し御ひらきになられた。すると、天下国土が又明るくなつた。

とて、神樂奏し、細男(才男)（せいなう）

をはじめ給ふ。中にも、天あま

の鉢女うずめの尊、すゝみ出て、

櫛さかきの枝に幣しでを附て、声を挙あ

げ、ほどろ職踏しくふみ轟とどろかし、

神懸かんがかり為すと、歌うたい舞奏かなで

給たまふ。その御声、窃ひそかに聞きこ

ゑければ、大神岩戸すこを少し

開ひらきたまふ。國土又明白た

り。神達の御遊面ぎよゆうしろかり

けり。其時の御あそび、申さる

樂の初はじめと云ふ。委くはしくは口伝に

あるべし。

た。そして神達の御遊がまことに面白
かつた。その時の御歌舞が、申樂の始
めだといふことである。詳細なことは
口伝にあるであらう。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著